

私たちは子供の頃から身長や身近な物の長さをメートルを単位として測っているのですが、1 m がどれ位の長さかを実感としてもっています。では、なぜ1 m が現在の長さに決まったかという疑問が生まれます。そこで、まずインターネットで検索して調べてみます。しばらく調べてみると、長さの単位は約 6000 年前の古代メソポタミア文明の頃から変わらず、ヒトの上腕の長さを基準として使われていたことがわかります。また、現在の SI 単位の基になったメートル法は革命当時のフランスで作られたことがわかります。メートル法では、1 m は地球子午線の 4 千万分の 1、つまり北極から赤道までの距離では 1 千万分の 1 と定められていました。この縮尺は古代からの長さの基準にできるだけ近づけたものです。

これで満足することなく、今度は図書館で調べてみます。書架を巡っていくと、ケン・オールダー著「万物の尺度を求めて―メートル法を定めた子午線大計測」（早川書房）が見つかりました。この本は、どうやら 18 世紀のフランス革命当時に地球の子午線の長さを測定するため、北部のダンケルクからスペインのバルセロナまでの三角測量の旅を題材にしているようです。早速借りて読んでみると、そこには、総延長 960 km という前代未聞の測量計画、先端技術による精密な測定器、ライバル意識をもつ 2 人の測量学者の確執、困難な作業の連続、ついに発生した人為的なミス、それを隠すためにデータ改ざんをした学者の苦悩、さらにはその誤りを知りながら公表しないで隠してしまうライバルの学者という今日的なドラマがありました。著者はアメリカ人ですがフランスの古文書を研究して隠されたなぞ解きをしています。結局 7 年間にわたる国家プロジェクトのわずかな測定誤差と地球が完全な球ではないことから、1 m は約 0.2 mm 短く決まってしまうしました。

歴史上の事件は私たちに無縁ではなく、生活にかかわる物事を直接左右することもあるという事実をこの例は見せてくれます。また、本を読むことには、新しい発見があるということを教えてくれます。元々は 1 m の基準を調べようと思っていた訳ですが、それ以上にプロジェクト型の事業に関わる技術者の直面する問題や起こりうる事態などの仮想経験を積むことができました。ちょっと得した気分です。

さらに、この例は、インターネットと図書館の性格の違いにも気づかせてくれます。インターネットの知識は、事実を短時間に知るには都合がよいけれども、ある程度のところで留まってしまい、それ以上深く知りたいときには不向きであるようです。もちろんインターネットには数多くの学術論文がありますから、一概には言い切れないのですが、電子ジャーナルは大抵有料ですからアクセス権がなければ利用できません。図書館の本は、1 次情報です。本の巻末には引用文献があり、出典が明らかにされていますから、どこまでも詳しく調べることができます。そこに図書館の存在意義があります。

ところで、本校の図書館には、現在、約 8 万 7 千冊の蔵書が閲覧室、書庫などに収められています。そのうち自然科学、技術・工学に分類される専門書はおおよそ半数の 4 万 3 千冊です。数字は、雑誌や古い重複図書の整理の結果、第 3 号（通算 32 号）の報告とはやや異なっています。閲覧用図書は、ブックハンティングや各学科の先生方からの推薦図書により、毎年約 1,400 冊を新しく購入しています。また、利用状況は貸出冊数が年間約 1 万冊で、CD を入れると 1 万 4 千点近くに達し、全国の高専中のトップレベルとなっています。しかし、この内訳を見ると、残念ながら、専門書では近年減少傾向にあります。予算に限りがあり、蔵書数や床面積で全国平均を下回る本校図書館としては、すべての分野で蔵書を増やすことはできません。専門書の蔵書数は、現状ではまだ不足している上、技術の進歩につれて内容が古くなるため常に更新しなければなりません。本校の使命が日進月歩の技術に対応する創造性ある実践的な電子情報系技術者の育成にある以上、専門書の充実が優先事項と考えています。学生の皆さんは、日頃の学習や実験レポートの作成に図書館の専門書をできるだけ利用するようお願いします。

最後に、最近残念なことには、本を粗略に扱う人がいることです。図書館から借りて読み終わった本を教室の後ろのロッカーの上に放置したり、ひどい場合には床に置いたりしているのを見かけることがあります。図書は、みんなの共有財産と思って大切に扱ってください。